新 任 職 員 研 修

2023.4.28 甲良町長

＝ 甲良町のまちづくり ＝

1．甲良町のまちづくりの基調（甲良町まちづくり条例）

◦ 人権尊重のまちづくり　◦ 住民こそ主役のまちづくり（住民参加のまちづくり）

（1） 法令・計画準拠の日常業務

◦ 第四次甲良町総合計画・第二期まち・ひと・しごと創生総合戦略

↓

［個別計画］

・令和４年４月１日　甲良町財政危機宣言

・令和４年１０月　甲良町第三次財政健全化計画

・令和４年12月14日議決　甲良町持続可能な地域づくり計画（甲良町過疎地域持続発展計画）

2．町長のまちづくりのポリシー

「今 直面している危機状態を脱せるか」

3．東京農工大学　中島教授の教示

「始める」よりも「続ける」ことが難しい まちづくり

… これら諸問題を抱えること自体、何ら悲観的に思う必要はありません。長年にわたり、まちづくりを頑張ってきた証であり、言わば選ばれし先進地域の名誉ある“勤続疲労”だと私は思います。…

（東京農工大学名誉教授　千賀裕太郎先生は、「三つの間」が大事だと）

4．地域の特徴を伸長させる

① 水と緑の農村景観

甲良町が国土庁長官から平成７年３月２２日に「水の郷」に認定

貴殿は地域を挙げて水に係わる特色ある生活文化等を維持発展させるとともに水環境の保全整備に説教的に取り組み健全な水循環の形成に成果を上げていると認めここに「水の郷」として認定します

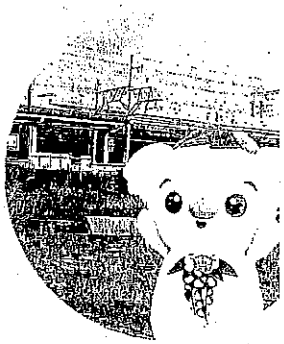
② 歴史文化＆甲良三大偉人

戦国大名“藤堂高虎”は甲良町公認のイメージキャラクター

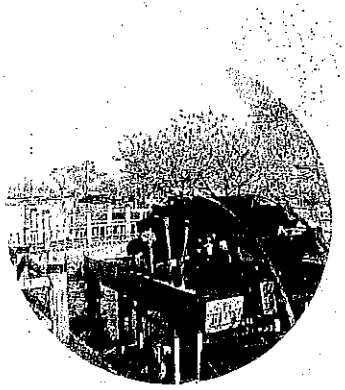
・藤堂高虎公を大河ドラマに　・高虎サミット（５市町）　・新作能「高虎」

・藤堂高虎ふるさと館「和の家」　・清酒「高虎」（純米酒・大吟醸）

5．その他

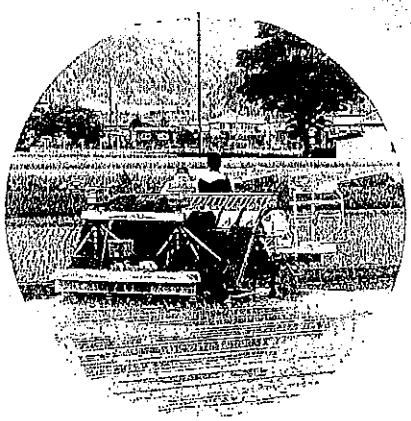


第4次
甲良町
総合計画



せせらぎのように美しく、
一人ひとりが輝くまち

～ 住む人が誇りに思う町をめざして ～



甲良町
KOURA TOWN

第２節　計画の役割

本計画は、まちづくりの方向性に対する施策の基本的方向を策定するものであり、町の最上位計画に位置づけられます。行財政運営を合理的に進め、総合的かつ計画的なまちづくりを行うための指針となるものです。

国では、平成23年５月に「地方自治法」が一部改正され、これにより市町村における「基本構想策定の義務づけ」が撤廃されました。しかし、本町においては、総合計画における基本構想、基本計画の重要性に鑑み、引き続き計画を策定します。

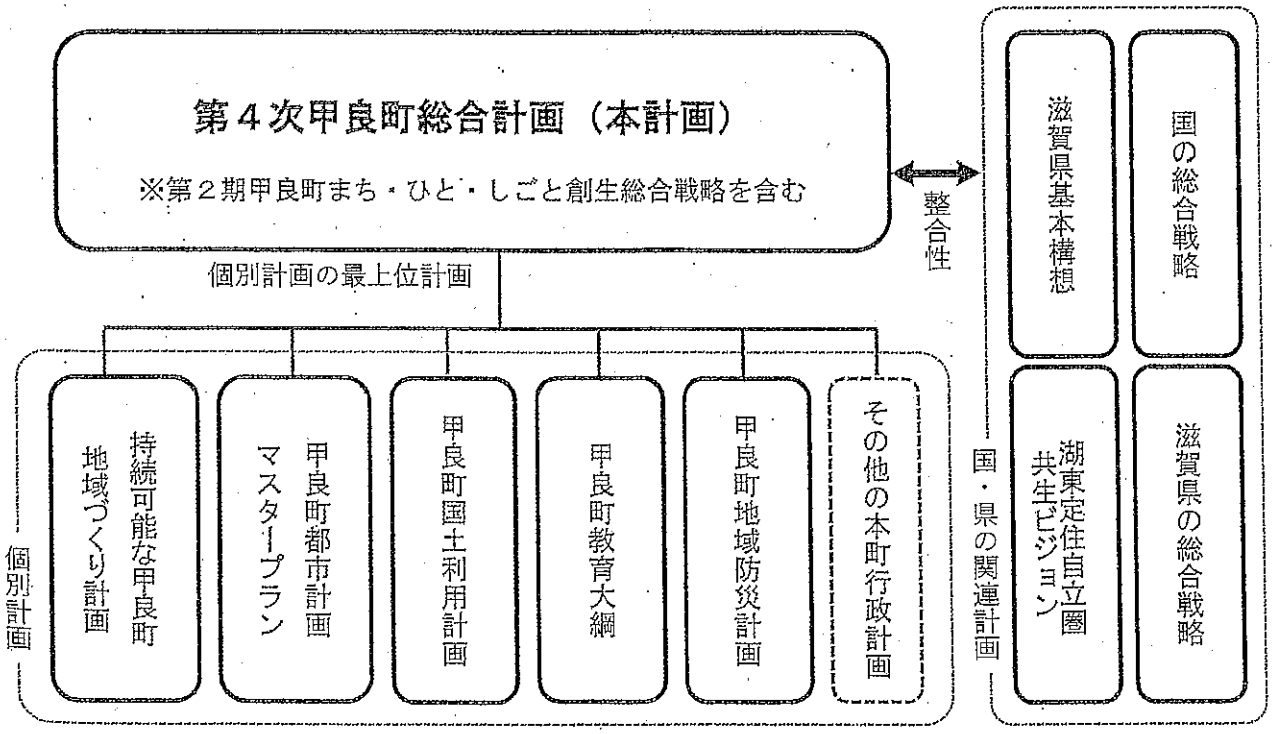
本計画は、行政の役割を体系化し、住民参加によるまちづくりを推進するための活動指針となるとともに、各種の地域計画の策定や事業、取り組みにおいて、行政、住民、事業者等の役割を明らかにし、その実施を要請するものです。

また、近年の地方創生の政策展開を受け、「総合戦略」と一体的な運用をめざすものとし、本計画に「第２期甲良町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を包含するものとします。中長期的なビジョンの下で、住民や事業者、行政が一体となってまちづくりに取り組むことは、「甲良町まちづくり条例」の理念にも合致するものです。条例に基づく議会との協議を経ることで、行政の一義的な計画の枠を超え、地方公共団体としての自治体計画として位置づけ、町全体でめざすべき「町の将来像」に向けて、一丸となって取り組みます。

さらに、計画の実施、進捗状況等の進行管理については、個別計画との連携を保ち、特に力を入れるべき主要施策（重点プロジェクト）を中心に行います。計画の広報・広聴については、町の広報誌やウェブサイトを活用するなどして、広く住民に周知を図ります。

なお、国・県の方針や計画に対応し、必要に応じて計画の見直しを検討します。

■本計画の位置づけ



序　章

今 直面している集落危機を脱せるか
＝一人ひとりの力を結集するとき＝

私は、戦後の団塊世代のすぐあとの１９５０(昭和25)年生まれの７０歳。

北落には、男９人・女６人の１５人の同級生がいた。うじゃうじゃ子どもがいた時代…　モノはなかったけど良き時代に生きさせてもらったと実感しています。

皆さんのご支援をいただきお陰様で町長職に就かせてもらっています。北落生まれだからこそ、北落モデルの「みんなでまちづくり」を貫きたいと思っています。

１．戦後を支えた「昭和一ケタ」世代のおかげ

戦後から、安定した今次を迎えさせていただいたのは、「昭和一ケタ生まれ」の人たちのど真剣さを忘れてはなりません。

その人たちは、生業を持ちながら字のことを自分のことのように優先されていた。

- お寺のこと、お宮さんのこと
- 綜普請（道普請などの共同作業）が現在の区有林保全活動に繋がっている。
- 綜寄り（今の総会スタイルでなく、神前で氏子として心を浄化しながら意を決する）

この時代があったからこそ、圃場整備で水利が、字公共施設が整い不自由さがない日常を過ごさせてもらっています。　　役のがれ…　責任のがれ…　それでいいのですか？

２．連綿と続いてきた「歴史」に学ぶ

人類の歴史は、地球誕生の歴史からするとほんの短時（調べて下さい）です。

日本を見ると、明治時代から１５０年の間に急速に人口が増え、インフラ（社会資本整備）が整い、モノが豊かになり過ぎたことによって、経済至上主義に悩ましさを抱え、近年の恐るべき自然災害の猛威がいつ襲いかかってくるかもしれない不安に駆られています。

科学技術の力によって、豊かさを享受してきましたが、自然と共生することを忘れ、開発(※)の名において自然を痛めつけてきたことのしっぺ返しに、まだ気が付いていないことが問題だと思います。

他人事と捉えるのでなく自然の反作用だと自分自身が反省し、他の動植物と同じように自然の中でつつましく生きる人類でなければ生き永らえません。

開発(※)…荒地の開発、電源開発、新製品の開発などをイメージすることに間違いありませんが、本来は「良い社会を、良い人を育てる」広義の意味があります。

３．北落の将来を憂うからこそ

- 子どもたちが群れて遊ぶ姿が見えなくなりました
- 大家族の世帯構成でなく、お年寄り家庭がふえています

◦ 空き家もまだまだ増えそうです

◦ でも新築住宅、移住者も北落には来られています

北落は、縄文中期から人が住み着き４５００年余に亘る歴史があります。

時代変化が激しく、前記の社会現象となってきましたが、北落に生きる私たちが、今こそ「課題」を浮きぼりにして、対策を練り上げ実践を積み上げなければなりません。

そんな簡単なことではありません。

幸い、区の補助機関に「むらづくり委員会」があります。

専門家の方、大学の先生、学生調査の力を借りるなどして、今次の集落計画をもとに一つひとつ積み上げる日常活動こそ重要です。

区民の皆さまのお力が必要です。ご協力をお願いします。

４．魅力ある集落づくりに展望を

易行寺のご住職が数年前の敬老会で法話をされました。

大事なことは、“簡素化”の名において今まで続けてきた伝統や行事を廃止することは、自らの身を削る結果になり、取りかえしがつかなくなることですよと…

北落ならではの多くの年間行事を謳歌し、楽しみながら行事を守り続け、参加をする継続の力を大事にしましょう。

☆ 家族団らんの大切さ

・朝“おはよう”から“おやすみ”までどれだけの会話ができていますか

☆ 仏様・氏神様にご加護をいただいて

・苦しいときの神頼み…でなく、仏様に見守られ、神前で謙虚な自分を確かめていますか

☆ 趣味と得意技を身に着けよう

☆ 北落の子は、北落で育てよう

☆ 北落に住んでるからこそ、住み心地のよい村にしよう

わかり合う相互理解、認め合う相互寛容、心かよう友好の増進をはかることに心がけ、支え合い助け合うワクワク感のある楽しい村をみんなで築きましょう！

野瀬　喜久男

第1章（寄稿）

第3次北落集落計画に寄せて

東京農工大学大学院　農学研究院
農村地域計画学研究室
教授　中島正裕

「始める」よりも「続ける」ことが難しい、まちづくり

1．「せせらぎ遊園のまちづくり」を代表する北落集落

甲良町で「せせらぎ遊園のまちづくり」が始まってから 30 年が経過しました。1996 年には「水の郷百選」（国土交通省）に認定されるなど、90 年代の甲良町は『水を基軸とした住民主体のまちづくり』のトップランナーとして、県内外から高い評価を得てきました。そして、甲良町の取り組みを参考にしようと、数多くの自治体や団体が視察に訪れました。当時、甲良町は「せせらぎ遊園のまちづくり」における“全盛期”を迎えていたといっても過言ではないでしょう。

このような時期を迎えることができたのは、13 集落それぞれが住民自治を大切にしつつ、集落の魅力を最大限に生かした活動を頑張ってきたからです。そして、これまでの実績・功績からみて、北落集落は間違いなく「せせらぎ遊園のまちづくり」を代表する集落といえます。

本稿では、第 3 次北落集落計画に寄せて、甲良町全体と北落集落の双方の観点から、私が“まちづくり”に関して常日頃から大切に思っていることを、4 つに整理して述べたいと思います。

2．甲良町の今とこれから

私が甲良町を初めて訪問させて頂いたのは、1999 年の冬でした。当時はまだ、千賀研究室の大学院生（博士課程 1 年生）でした。訪問の目的は、北落集落を含む数集落の小学生を対象としたワークショップの手伝いだったと記憶しております。

あれから、約 20 年が経過した現在、千賀裕太郎先生（現在：東京農工大学名誉教授）と同じ東京農工大学で教鞭をとっております。私の専門分野は、千賀先生と同じく農業土木をバックグランドとする農村計画学です。全国の中山間地域と呼ばれる条件不利地域や東日本大震災の被災地において、コミュニティ再生、農地保全、農村ツーリズムの事業評価、住民の意思決定支援に関する研究や実践支援活動を研究室の学生と一緒に行ってきました。その間、甲良町を訪問する機会に恵まれませんでしたが、縁あって、2017 年度から甲良町のまちづくりにも関わらせて頂く機会をいただくようになりました。

千賀先生と学生が毎年、頻繁に甲良町を訪問していた頃からは随分と時間が経っていたので、私にとっては期待と不安が入り混じるなかでの“再訪問”でした。

2018年度から3年間、甲良町役場から依頼を受けて『集落コミュニティ活性化のための基礎調査委託』(受託研究)を行いました。今後の甲良町の将来を検討するにあたり、先ずはこれまでを振り返り、「せせらぎ遊園のまちづくり」を様々な観点から検証することが調査の主な目的でした。

3年間の調査結果を要約しますと、甲良町の現状としては、90年代に当時形成された住民主体のまちづくりの枠組み(①行政―住民―専門家のパートナーシップ、②住民の定期的なまちづくりに関する学習機会、③住民組織の計画遂行機能)が多くの集落において機能しなくなり、世代を問わず住民の方々が様々な不安や問題を抱えていました。さらに、13集落それぞれの実情に目を向けてみると、“親水施設の利用・管理の状況に差異がみられる”などといった水環境整備事業導入後の集落間格差に加えて、“代々継承してきた集落行事の廃止や縮小を余儀なくされている”など、いわば集落の存続に関わる本質的問題も抱えるようになっていました。

しかしながら、これら諸問題を抱えること自体、何ら悲観的に思う必要はありません。長年に渡り、まちづくりを頑張ってきた証であり、言わば選ばれし先進地域の名誉ある“勤続疲労”だと私は思います。

重要なのは、今後このような問題の解決に向けて、各々の集落において「世代交代」と「継承」を如何に図っていくかです。つまり、長年にわたり「せせらぎ遊園のまちづくり」で主役を張ってきた、現在の第一世代(主に現在60～80歳代)から第二世代(主に現在30～50歳代)への世代交代を円滑に図るとともに、時代のニーズや生活様式の多様化に順応しつつ、これまでの活動を継承していけるような改変が必要となります。そして、甲良町は今まさに、改変への過渡期を迎えているといえます。

3．まちづくりとは？　～「始める」よりも「続ける」ことが難しい～

ここでは、そもそも“まちづくりとは？”ということについて、私の考えを述べたいと思います。「せせらぎ遊園のまちづくり」ともあるように、違和感なく使っている用語ですが、いざ言葉で具体的に説明するとなると、なかなか難しい用語です。

まちづくりとは図1に示すとおり、“今の姿”(現況)と“あるべき姿”(改善目標)の間に介在する“問題”を解決することです。そして、問題解決のためには、3つのプロセスが必要となります。まずは、①『あるべき姿を邪魔する“問題”は何か？』を突きとめることです。次いで、②『“問題”を解決するために取り組むべき“課題”は何か？』を明確に設定することです。最後に、③『いつ？、誰が？、どのように“課題”の解決に取り組むか？』を検討して決めることです。これら3つのプロセスに取り組んでいくことが、“まちづくり”の要件であり具体的な行動となります。しかし、まちづくりの現場をみると、ワークショップ等で気運が高まったものの実行(行動)には至らず頓挫するケースも多くみられます。これは、ここで言うところの③が難しいからであり、“まちづくり”を始めることが難しい所以だと思

います。

さらに、①～③はまちづくりの１つの周期（およそ５年）であり、③が上手く行動できたとしても、それで完了ではありません。時代とともに社会情勢が変化し、それに伴い人々の価値観も多様化するなかで、当初設定していた①における「あるべき姿とそれを邪魔する“問題”」も変わってきます。このため、最初の１周期目（①～③）の検証を行ったうえで、新たな２周期目（①～③）に入っていくことになります。つまり、まちづくりを続けていくということは、周期的に①～③が繰り返されていくことを意味します。

そして何周期もの間、①～③において中心的かつ意欲的に関わってきた世代が高齢化すると、次世代にバトンを渡す世代交代が必要となります。しかし、何周期も経た後に迎える新しい周期（①～③）においては、まちづくりが始まった最初の周期目（①～③）よりも遥かに複雑で難しい問題が増えています。さらに、バトンを渡される世代の中には、まちづくりに関わることも関心を持つこともなかった人が多く含まれます。こうした状況を踏まえると、まちづくりは、「始める」よりも「続ける」ことが難しいといえます。

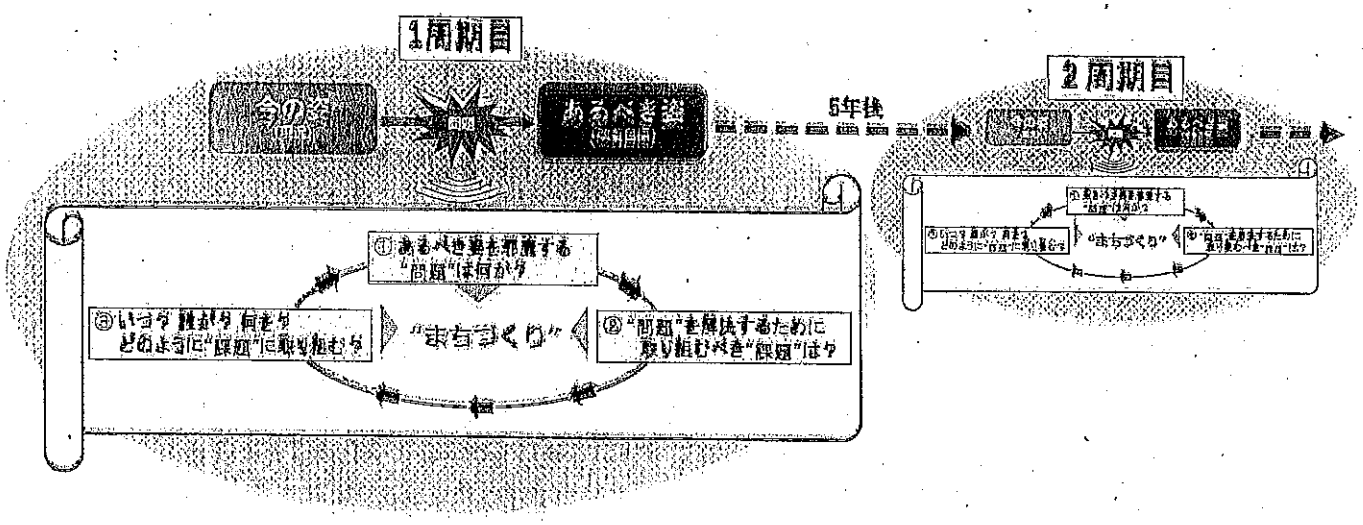


図１　周期的にみた“まちづくり”の概念

４．今後のまちづくりに大切なコト

ここでは、先に述べた“まちづくり”の周期（①～③）を繰り返していく中で必要とされる、「世代交代」と「継承」のために大切なコトを述べさせて頂きます。

それは、単刀直入に言うと「慣習的な考えからの転換」です。集落の伝統行事、親水公園や集落内水路の清掃活動などにおいて、“昔からやってきたから、（次世代も）引き継ぐのが当たり前”とするのではなく、こうした活動を次世代が引き継ぐことの動機付けを明確にすることが重要となります。そして、「世代交代」と「継承」を図るうえで、世代を問わず共感・共有できる動機付けとしては、「有事の際の危機

管理」が有効だと私は思います。

先行研究において、『お祭りやイベントをはじめとした日々の自治会活動が、実際の災害時に有効に作用した』という指摘もあるように、近年多発する大規模災害（地震や集中豪雨）など有事の際の住民間の助け合いや災害ダメージからの回復力（レジリエンス）には、集落の伝統行事や清掃活動などによる平常時のつながりが重要とされています。

これに付随して、東日本大震災からの復興に関する具体例を１つ紹介したいと思います。東日本大震災で津波による甚大な被害を負った宮城県東松島市大曲地区の復興圃場整備は、他所よりも早期の営農再開を果たしました。その要因には、震災前からの伝統行事や４H クラブなどを通した日々の繋がりから生まれる強固な人間関係が大きく影響していました。

このように、研究成果や現場の実態からは「有事の際の危機管理」が、まちづくりにおける世代交代と継承の有効な動機付けとなることが実証的に明らかとなっていますが、甲良町においてもその兆候は既にみられます。具体的には、先に紹介した『集落コミュニティ活性化のための基礎調査委託』（受託研究）の結果の中で、若い世代から以下の意見がありました。

> 「*大きな災害が来たとき自分たちの集落だけでは対応できない。近隣の集落と部分的な連携、非常時の連携。そのために運動会などイベントを一緒にやるとか。そういうつながりがないと非常時の繋がりも難しい。*」

このような意見は、世代交代と継承において「有事の際の危機管理」が動機付けとして有効であるにとどまらず、集落間連携の重要性も指摘するものでした。甲良町では、どちらかというと 13 集落が競い合いの精神のもと、それぞれの集落でまちづくりを頑張ってきた傾向にありますが、今後は集落同士が連携して協力し合うことも求められていくと思います。

５．「第３次北落集落計画」を生きた計画にするには

「第３次北落集落計画」を生きた計画、つまり策定した計画が実行されて集落に役立っていくには、次世代の参加が不可欠です。そして、次の「第４次北落集落計画」の検討に入るまでの期間（約 10 年間）が「世代交代」と「継承」への移行期であるといえます。この期間において、まずは「せせらぎ遊園のまちづくり」を主体的に担ってきた第１世代（主に現在 60～80 歳代）が、“これまで、何を、どのような思いで守ってきたのか？”、“これからも何故、守る必要があるのか？”ということを、第二世代（主に現在 30～50 歳代）に対して丁寧に伝えていく「場」が必要となると思います。その際、“いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、

新しく変化を重ねているものを取り入れてく”という『不易流行』の精神が両方の世代にとって大切であると思います。

また、2020年3月以降、日本中に感染拡大が広まった新型コロナウィルス（COVID-19）は、まちづくりにも様々な影響（寄合や行事の中止・延期）を及ぼしてきました。いまだに新型コロナウィルス（COVID-19）の終息の兆しが見えず、閉塞感漂う“ウィズ・コロナ”（コロナウィルスと上手に付き合う）の状況に順応していくことが日常生活において求められています。こうした状況を全ての面から否定的に捉えるのではなく、少なくともまちづくりにおいては“何が変わり、何が変わらないのか？”、そして“真に必要なものは何か？”ということを、世代を超えて考える貴重な機会だと捉えてはいかがでしょうか。そうすれば、「第3次北落集落計画」を礎として、北落集落の将来のあるべき方向性もみえてくるはずです。

今後、東京農工大学農村地域計画学研究室も微力ながら、お手伝いできることが多々あるかと思います。その際には是非、お声かけください。

末筆ではございますが、「第3次北落集落計画」の完成を喜ぶとともに、これからの北落集落の益々の発展を祈念して止みません。

2012年4月8日

敬具